

# 経済学・経営学分野の論文における Critical Reviewの方法とLiterature Review の書き方に関する考察

中 谷 安 男

## 1. はじめに

世界の大学の競争力を示すリーグテーブルが毎年発表され、学部や大学院のランキングが分野ごとに公表される。このため、世界中の多くの大学は、順位を少しでも上げるために努力を行っている (Hazelkorn, 2007; Starbuck, 2005)。ランキングの評価には様々な基準があるが、特に客観的で重要なのは、各大学の研究能力の高さとなる (Takayama, 2008; 中谷, 2017, 2019)。これは、在籍する研究者の論文がトップジャーナルにどれほど掲載され、いかに高いインパクトファクター等を所持しているかが大きな影響を与える (Del Saz Rubio, 2011)。

このような状況のもと、日本の大学における今後の課題が指摘されている (石川, 2018; Nakatani, 2017a, b, 2018)。例えば、自然科学分野に比べると、日本の経済学・経営学分野の学部のランキングは世界で高いとは言えない。大学ランキングの信頼性が高いと考えられている Times Higher Education の *The World University Ranking* がある。これは毎年公表されるもので、2020年の経済学・経営学分野では東京大学が31位、京都大学が81位と100位以内にランキングされている。<sup>1)</sup> ところが、論文引用件数を表す Citation の指数では、東京大学が上位100位の中で98位、京都大学が100位

となっている。もちろん、大学の競争力は、論文の引用数だけで決まるものではない。しかし、研究成果である学術論文発表力としては、残念ながら日本の大学は、この分野では世界のトップランク100校の中で底辺に甘んじている。

これは日本の大学の研究力が決して低いわけではなく、論文としての執筆に課題があると考えられる(中谷, 2015, 2016)。現在、世界の主要なジャーナルは英語による執筆が標準となっている。実は英語による論文執筆は、ネイティブの大学院生でもそれほど容易でない(Jordan, 1997)。このため、英国のオックスフォード大学でも、Language Centre に英語論文執筆のための Academic Writing (AW) のコースが設置されている。また、同大学の各学部でもセミナーなどを通して、論文執筆のために戦略的に取り組んでいる(中谷, 2017, 2018 a, b)。一方、日本の経済学・経営学の分野において、英語論文の執筆を戦略的に取り組んでいる所はほとんどない。論文掲載への戦略の重要性は、日本において認識が低いのが現状である(中谷, 2019)。

*International Economic Review* や *Strategic Management Journal* などを出版している Wiley 社の報告では、投稿された論文の約20%が、査読者に回らずに編集者がすぐに不採択と判断する。<sup>2)</sup> これは、国際的な査読付き学術誌に向けた執筆の戦略が不十分な場合は、門前払いをされるという例である。これまで応用言語学の分野では、世界の大学が抱える英語論文執筆の課題に関して様々な研究や取り組みが検証されてきた。これは、博士論文の執筆から学術論文への掲載には、大きな隔たりがあることによるものである。ジャーナルの編集者や査読者を説得するには、様々な Academic Writing Strategies (AWS) の習得が必須となる(Del Saz Rubio, 2011; 中谷・清水・土方, 2011)。

AWS分析のために、Swales (1990, 2004) は、ジャンル分析(Genre Analysis)という、分野ごとにディスコースを検証する概念を提示した。英語学術論文における、修辭的なムーヴ(Move)による文体分析を活用

し、AWSを明示していく方法である。ジャンル分析による様々な研究で、論文の Introduction, Method, Results, Discussion の構成要素が明らかになってきた(中谷, 2012a,b, 2013)。さらに、これらを活用した研究論文の英文執筆方法が確立されつつある(中谷, 2016)。しかしながら、経済学・経営学の学術論文に特化した分析はあまりない(例 McGrath and Kuteeva, 2012)。特に、編集者や査読者を説得するための Critical Review の方法と Literature Review の書き方に関する戦略はほとんど検証されていない。特に、この分野における論文を大量なデータとして分析したものはない。本論ではこの点に注目し、経済学・経営学を代表するインパクトファクターの高い学術誌に掲載された論文100本を中心に、経済学・経営学の論文コーパスを構築し、この150万語のコーパスデータを分析して、該当部分の執筆に関する示唆を行う。

## 2. 研究の背景とデザイン

前述の Wiley 社のHPの情報には、投稿に関する詳細な規定やガイドラインがある。この中で、編集者が、査読者に回す必要がないと見なす理由は以下の5つにまとめられる。<sup>3)</sup>

1. 論文投稿のガイドラインに沿っていない
2. 原稿がジャーナルの目的や範囲に合わない
3. 該当分野の重要な研究が含まれていない
4. 英文の質が十分でない
5. 読者に興味を持たれない内容である

1の「論文投稿のガイドラインに沿っていない」は、論文の形体であり、投稿前にしっかりと確認すれば問題は少ない。ここで注目したいのは、2の「原稿がジャーナルの目的や範囲に合わない」と3の「該当分野の重要

な研究が含まれていない」である。ジャーナルの目的や範囲は、投稿規程にある程度記載されているが、雑誌によって特に重視している分野や、研究領域のトレンドによって変化がある。このために特定のジャーナルの最近の掲載論文などを確認しておく必要がある。該当分野の重要な研究が含まれているかどうかは、研究テーマに関する主要な論文や最新の掲載論文を引用する必要がある。簡単にいうと、先行研究をもれなく十分レビューして適切に批評し、投稿論文の中で引用し議論を行うことである (Nwogu, 1997)。

これらは、論文掲載経験の多い研究者にとっては、当然のこのように思われるであろう (Shaw, 1992; Yang and Allison, 2003; 中谷, 2012a)。しかしながら、これまでの研究で、実際にどのように Critical Review を行い、その結果に基づき、いかに Literature Review の執筆を行えばよいのか、明確に議論した論文はほとんどない。特に経済学・経営学の論文に注目して、これらの課題を実際の論文コーパスを基に議論したものはない。これらの観点から本論は、以下のようなコーパス言語学の手法で、この課題に取り組む。

## 2.1 経済学・経営学の学術論文コーパス作成

この章では、コーパスデータを統計分析した結果から Critical Review の方法と Literature Review の英語による書き方を考察する。コーパスデータ分析とは、大量の言語データをコンピュータに入力し、文書の特徴を解析する信頼性の高い方法である (Biber, Conrad and Leech, 2002)。分析ツールであるコンコードンサーのソフトを活用し、使用頻度の高い特徴的な語彙や表現を抽出し、それらが論文のどこで、どのように使用されているのか確認することができる (Hyland, 2004, 2005; Nelson, 2006)。

本研究では、以下のインパクトファクターの高い8つの学術誌に掲載された論文を中心に、経済学・経営学の論文コーパスを構築し分析する。

- ・経済学系：*American Economic Review*, *Econometrica*, *Quarterly Journal of Economics*, *International Economic*
- ・経営学系：*Academy of Management Review*, *Academy of Management Journal*, *Strategic Management Journal*, *Journal of Marketing*

## 2.2 分析手法

上の学術誌における2006年より2017年掲載の論文から、第一著者が英語母語話者と思われる論文100本を選定した。電子ジャーナルからダウンロードし、テキストファイルに変換し、総語数約150万語の経済・経営論文コーパスデータを作成した。この大量のコーパスデータを、米国英語・英国英語の代表的な文書コーパスである FBROWN 及び FLOB コーパスの200万語と比較検証した。この結果から、論文の IMRD (Introduction, Method, Result, Discussion) の各章に特徴的な語彙や表現を抽出した。

手順としてまず、経済・経営論文コーパスにおける特徴語の中で、動詞に注目し分析を行う。一般に動詞は、出来事を表す動詞 (Event verb) と伝達動詞 (Reporting verb) の主に2つがある (Hyland and Tse, 2004; Koutsantoni, 2004)。本研究では、先行研究に関して言及する際に使われる Reporting Verb に焦点を当て、経済学・経営学の代表的論文がどのように先行研究を報告するのかについて検証する。この結果から、引用を行うのに必要な Critical Review の方法を考察する。さらに、それに基づいた Literature Review の執筆方法について提案を行う。

## 2.3 出来事動詞

出来事動詞は、実際に行われた活動や出来事などで、それが実施された時点によって過去時制、現在時制で表現される (Salager-Meyer, 1992)。次の例 (1) は、小売業者が現在実施している商習慣を現在時制で表している。一方、(2) では、Edisonが「プロジェクトを引き受けた」という過去の1時点での出来事を過去時勢で表している。このよう出来事動詞は起こ

った事象に関する時制であり、特に書き手のスタンスは影響を与えない。このため、本研究では対象としない。

- (1) Retailers frequently lower their prices below the competitors' level.
- (2) Thomas Edison undertook a variety of ambitious projects.

## 2.4 伝達動詞

伝達動詞は、論文の書き手のスタンス (Stance) を表現する際に活用される。スタンスとは、特定の事象や引用した研究に対する自分の立場となる。これらは、動詞の時制である、過去時制 (Past tense), 現在時制 (Present tense), 現在完了形 (Present perfect tense) として活用される。書き手は、これをうまく使い分けて、読者に自分の先行研究へのスタンスを示す必要がある (Swales, 1990)。

### 2.4.1 現在時制

伝達動詞の現在時制は、書き手の見解を強く示す時に活用される。次の例 (3) は、Hugh の2002年の論文では、特定の役割に焦点を当てていることを書き手が報告している。

- (3) Hugh (2002) highlights their role in regulating access to resources.

ここで注目したいのは、Hugh の研究は、2002年に行われたことなので、今の時点では既に過去の内容である。しかし動詞は *highlights* という現在時制になっている。この文は動詞の現在形を使うことで、書き手のスタンスに近く、支持している内容として報告している。このように伝達動詞の時制は、それが行われた時期ではなく、伝達する内容と書き手のスタンスの距離を表す。

#### 2.4.2 過去時制

伝達動詞の過去時制は、一過性のもので、書き手のスタンスとは距離のある内容を伝達する時に使われる。例の(4)では In contrast to our approach という文頭のメタディスコースで始め、書き手とは異なる手法を使った内容が来ることを示している。このため Stewart (2009) の研究の報告に関しては、いずれも過去時制を使い、書き手のスタンスとは異なることを伝えている。

- (4) In contrast to our approach, Stewart (2009) performed a simple calibration exercise to evaluate the data and did not explore its ability to explain business cycle dynamics.

#### 2.4.3 現在完了形

伝達動詞の現在完了形は、過去のある時点から現在まで続いている事象の報告と考える。例の(5)は、過去から複数の研究が支持している客観的な報告となる。また、現在完了形は、書き手の研究テーマなどの客観的な価値を示す時にも活用される。次の(6)のように、複数の先行研究が支持していることを表現し、論文の取り扱う課題の重要性に客観性があることを示すことになる。

- (5) Numerous ideas have been advanced regarding CMOs' function.  
(6) Many organizational studies have considered the effects of accountability in various organizational decision-making Context (Alex, 1985; Smith, 2004; Woodson, 2015).

### 3. 結果：経済・経営論文コーパスにおける Reporting Verb の活用方法

これまでのAWの先行研究の成果として、伝達動詞には主に以下の3種類あると考えられる (Thompson & Ye, 1991; Tomas & Hawes, 1994; Hyland, 2004)。

- 1 研究の手順や発見の報告 (Real-world verbs)
- 2 先行研究の執筆者の考え (Cognition verbs)
- 3 先行研究へのコメント (Discourse verbs)

これらの各伝達動詞が経済・経営論文コーパスにおける特徴語としてどのように使用されていたか確認していく。

#### 3.1 研究の手順や発見の報告に使われる伝達動詞

これらは、先行研究の中で実際に行われた手順を報告したり、発見について述べたりする動詞となり、Real-world verbs と定義される。意味は、「先行研究が～を行っている」という用法となる。次のような動詞が使われ、単なる一過性の事象として報告する際には、過去の形をとる。

• use, conduct, examine, investigate, explore, find, show, demonstrate

表1にこのグループの伝達動詞と、同様な意味で使われる動詞の特徴の違いを記載している。また、該当コーパスの特徴語として、どのような時制と共に使われていたのか ( ) の中に使用頻度を掲載している。

以下に代表的な動詞の特徴と表現を見ていく。



**表 1 経済・経営論文コーパスの研究の手順や発見の報告に使われる伝達動詞**

意味	特徴	経済・経営論文コーパスにおける時制と活用数
使う	一般に	use (1517), used (1076)
実行する	実験などを	conducted (183)
調査する	より具体的に	examine (335), examines (55), examined (203)
	一般的に	investigate (104) investigates (16) investigated (40)
	探究的に	explore (201), explores (25), explored (94)
示す	一般的に	show (764), shows (617), shown (438)
	強調して	demonstrate (92)
発見する	具体的に	find (783)

### 3.1.1 use, conduct の使用法

use は現在時制で活用される場合もあり、文献で使用されている手法を書き手も支持している時に使われていた。実行するという意味の conduct は、過去形の使用のみで183回使用されていた。これは、単に先行研究で実施された、という事実を述べる時に使う傾向があった。

### 3.1.2 examine, investigate, explore の使用法

これらの動詞は、研究における調査を報告する際に主に使われていた。この中で、examine と investigate は、ほぼ同じ意味で使われ、一般的にはどちらを使ってもよいと考えられる。ただし、examineの方が使用頻度は高く、どちらかという目にある具体的な課題を調査するという特徴がある。Investigateの方が使用頻度は低く、より一般的な問題の解決を求めるといった特徴がある。

同じ研究者による次の2つの例で、どのように動詞を使い分けしているかを示す。例(7)のexamineは具体的な「R&Dの影響」の調査である。一方、(8)のinvestigateは「どのような影響があるのか」という射程の広い調査となる。また、例(9)のようにexploreは、より広く課題を探究するという意味合いで使われる。

- (7) They examined the effect of R&D expenditures during the 2010 time period
- (8) They investigated how ownership affects investments.
- (9) They explore the policy implications of technical change in such a setting.

### 3.1.3 show, demonstrate の使用法

これらは、先行研究の成果を示す時に用いられる。より具体的な発見を示す時には find を使う。これらの特徴語としての使用は、現在時制が中心であり、書き手の論文に有効な先行研究の結果を報告する時に使用される傾向があった。

一般的には show の使用頻度が高く、demonstrate はより具体的な証拠などを伴って示す時に使われる。find は、特に書き手の論文に重要な先行研究の結果を示す際に使われる傾向があった。次の例 (10) は James and Marks (2003) の研究に対して find を使い、自分の論文に影響のある成果ということを示唆している。

- (10) James and Marks (2003) find that national culture directly affects consumer financial decision making.

## 3.2 先行研究の執筆者の考えに使われる伝達動詞

このグループのコーパス分析結果を表 2 にまとめている。これらが Cognition verbs と呼ばれるのは、先行の研究者の考えを伝えるからである。

表 2 経済・経営論文コーパスの先行研究の執筆者の考えを伝える伝達動詞

意味	経済・経営論文コーパスにおける時制と活用数
考える	assume (340), assumes (79), assumed (135)
見なす	consider (517), considers (67), considered (247)

このような *assume* や *consider* は、引用した研究者が論文の中に述べている意見や考えを、書き手が読者に伝達する動詞となる。

それほど多くの種類の動詞が特徴語として使われるわけではない。しかし表2が示す結果のように、これら代表的な動詞の使用頻度は高い。既存の研究者が想定した内容であり、書き手がそれを検証したり、反証したりする前提を示す際に用いられる。

具体的な使用例として(11)では、先行研究における考えについて *assume* を使って報告している。次の例(12)では、*have considered* と現在完了形を使い、伝達内容が複数の研究によって一般的な事実として認識されていることを示している。これらの先行研究の考察に対して、書き手がこれから何らかの議論を行う際に活用される動詞となる。

(11) Newman and Littlemore (2011) assume that income earners can engage in rent-seeking at the expense of tax revenues.

(12) Previous studies have considered such aspects of consumer financial decision making as budget allocations across categories.

### 3.3 先行研究へのコメントに使われる伝達動詞

これらの動詞は、先行研究の成果を報告する際に、書き手の立場がコメントとして示される。書き手が特定の意図こめて伝えるので *Discourse verbs* と呼ばれている。具体的には以下のような動詞が抽出された。

- *suggest, propose, describe, discuss, report, argue, note*

表3に経済・経営論文コーパスで使用された、これらの語彙の使用頻度を記載している。先行研究が示唆する内容を伝える場合は *suggest* が活用され、より具体的な提示の伝達には *propose* を使っていた。報告する研究が詳細に述べている場合は *describe* を使用する。*discuss* や *report* は、先行

研究を中立的な立場で伝える時に活用されていた。また *argue* は、これらに比べ引用した研究が強く主張していることを意味する。また *note* は、その研究が特に注目している点や、注意していることを報告する際に使われていた。以下にそれぞれの具体的使用例をみていく。

表3 先行研究へのコメント

意味	ニュアンス	経済・経営論文コーパスにおける時制と活用数
示唆する	一般的に	suggest (428), suggests (528), suggested(182)
提示する	具体的に	propose (114), proposed (169)
記述する	詳細に	describe (166), described (350)
報告する	一般的に	report (294), reports (309) reported (361)
述べる	一般的に	discuss (149), discussed (183)
示す	一般的に	show (764), shows (617), shown (438)
示す	証拠など共に	demonstrate (92)
記述する	注意して	note (225), noted (231)

### 3.3.1 suggest, propose の使用法

先行研究で提示された内容について、それが書き手の論文に示唆を与えている時に *suggest* が使われていた。また、その研究による具体的な提示にコメントをする際に *propose* が活用される。例の (13) と (14) は、同じ論文の中の活用例である。前者は書き手の研究への示唆を述べ、後者は引用した論文の具体的な提案内容を記載している。

(13) Authors suggest the potentially beneficial role of such status variables.

(14) Researchers propose three primary sets of turnover determinants: economic conditions, work-related factors, and individual conditions.

### 3.3.2 describe, discuss, report の使用法

先行研究が詳細に報告している成果について、例 (15) のように *describe* を使う傾向があった。Robert (1980) の研究では、3つのタイプについての詳細な記述があることを伝えている。

(15) Robert (1980) described three types of change that can occur in self-reports of behavior.

一方、研究報告の内容を中立的に、そのまま伝える時に discuss や report が活用される。(16) では、研究の成果である関連性を報告している。また (17) では、先行研究で述べられていないテーマを discuss で読者に伝達している。

(16) Shohamy (2006) reports that time in the store is positively related to unplanned purchasing.

(17) Only a few papers discuss the network capitalism and market transition theory.

### 3.3.3 argues, note の使用法

これらの動詞の使用により、先行研究の報告内容を強調して伝えることになる。例文 (18) と (19) は、同じ論文の中の活用例である。(18) は、研究を強調する argued を用いて読者に伝えている。なお、この英文は that 節以下が時制の一致を受けていない。少し古い文献からの引用であるが、報告内容の可能性について書き手が一定の支持をしていることがわかる。(19) では note を使い、事象の相関関係が書き手の論文にとって重要な報告であることを伝達している。

(18) Redman (1992) argued that managers may engage in corporate crime to serve their own short-term needs.

(19) Burt and Driscoll (2002) note the correlation between options and efforts to increase share prices.

### 3.4 that 節を伴う伝達動詞の時制

ここでは、書き手のスタンスを表す時制と伝達動詞との関連で使用法に注意が必要な that 節の例をさらに詳しく確認する。報告動詞は、that 節と共によく使われる。例 (20) のように argues という伝達動詞の後に that 節を伴い、具体的に Brown (2008) が述べたことを記載している。

(20) Brown (2008) argues that employees develop trust with the employer with strong psychological contracts.

このように that 節では、that の前と後に 2 つの動詞があり、それぞれ時制が書き手のスタンスを表す (Charles, 2006a)。that の前の動詞の時制は、引用した研究に対する書き手のスタンスを示す。that の後の動詞の時制は報告した内容そのものになる。上の例では、argues は現在時制なので Brown (2008) の研究は、書き手のスタンスと同じで、論文の中で重要な位置にあることが分かる。また、that の後 develop も現在時制なので、書き手はその報告内容を支持していることになる。

しかしながら、論文コーパスでは that 節が時制の一致を受けない例も多く見られた。研究論文では、伝達動詞の活用で書き手のスタンスを表すため、必ずしも that 節における時制の一致を受けない (Charles, 2006b)。

例の (21) では、James (2003) が評価を行ったのは過去の事実としているが、その報告内容は書き手のスタンスに近い普遍性があることを示している。前の動詞は過去形だが、後ろの動詞は現在形で時制の一致を受けていない。

(21) James (2003) estimated that two thirds of that loss is attributable to harmed firm reputation.

同様に次の(22)でも that の前は showed だが、後ろの動詞は are となっている。were という過去形ではなく、時制の一致を受けていない。Robison (2005) の研究を過去に行われた事実として認識しており、書き手の論文にそれほど影響を与えていない。一方、その報告内容は、書き手が今の時点で支持している事象のため現在時制を使っている。

(22) Robison (2005) showed that they are able to explain the response of unsustainable consumption to the rebate payments.

以上、この章ではコーパス分析の結果に基づき、経済・経営論文における報告動詞の活用方法を確認した。次の章では、この結果に関連してどのように先行研究をレビューすれば良いのか考察を行う。

#### 4. 先行研究のCritical Reviewの方法

研究論文の前提は、専門分野や研究領域に新しい価値を加えることである。このために、自らの研究成果が新しい発見や概念ということを証明する必要がある。英語論文ではこれを、「先行研究ではこれまで行われなかった」という観点から確立していくことになる。次の例(23)では、コーパス分析の結果、使用頻度が高かった There is little empirical study という表現を使い、これまで実験的な研究がほとんどなかったことを指摘している。

(23) There is little empirical study of how negative signals are unique from other signals…

しかしこのように書いて投稿して、関連するテーマの先行研究が抜けている場合は、前述の編集者が却下する理由3の「該当分野の重要な研究が含まれていない」ことに該当する。つまり、論文の独自性、新規性を訴え

るためには、主要なジャーナルに掲載された関連する領域の先行研究を全て確認する必要がある。主な学術誌の先行研究をレビューした結果、まだ行われていない研究課題であることを示す。

具体的に、先行研究を読むのに必要な技法は、批判的に事象を考えるクリティカル・シンキング (Critical Thinking) の活用である。これに必要な読み方を Critical Review (CR) と呼び、自分が書く論文の新規性を構築するための手法となる。この際に、以下の5つのポイントに疑問を持って読みこなす必要がある。

#### 4-1 理論やモデルに基づく解釈：分析結果を解釈する背景となる理論

これらは、通常は論文の Introduction の初めの方に明記されている。次の例 (24) は Handel (2013) の書き出しである。この論文では、健全な保険市場の障害がテーマで、その中で下線の研究者たちが初期に唱えた adverse selection という理論に基づいた考察だとわかる。

(24) “A number of potential impediments stand in the way of efficient health insurance markets. The most noted of these is adverse selection, first studied by Akerlof (1970), and Rothschild and Stiglitz (1976).” Handel (2013: 2643)

このように、最初に論文の中心となる理論を書くのが必須である。読む際は、なぜ著者がその理論が大切だと考えているのかを見つける必要がある。執筆するテーマと同じ領域の論文を読み続ければ、多くの著者が引用している理論が明らかになる。これが、いわゆる第一人者が構築した理論やモデルとなる。

トップジャーナルでは、この第一人者の理論へのチャレンジが求められる。チャレンジとは、理論をさらに発展させる、弱点を補強する、または反証し、例外を見つけて異なる理論の提案を行うことである。最終的に新



しい理論やモデルの構築が目標となる。

特に理論的な背景を正確に把握するには、第一人者たちの論文だけでなく書籍も読むことが求められる。一般的に書籍は、多くの紙面を使えるため、研究者の思想や哲学が書かれている。この思想的な背景を理解すれば、その理論を構築した理由や状況がよくわかり、チャレンジがしやすくなる。まとめると以下のようなCritical Reviewと言える。

- ・CR① なぜ、その理論・モデルが重要だと著者は考えているのか

#### 4-2 サンプル：実験や調査の対象者や対象物

Method の章の Research Design を読めば、研究の対象が明らかになる。例えば、対象が人の場合は、在住している場所、職業、年齢、性別やその他の検証に影響を与える「因子 (variable)」が記載されている。

この箇所で CR を行い、どうしてそのサンプルを選んだのか、なぜ他では実施できないのか把握する。これまで行われた実験と異なるこのサンプルを対象にすることが、論文の新規性を出す一番容易な方法である。次のような CR の観点から読みこなすことになる。

- ・CR② なぜ、それらのサンプルを対象としたのか

#### 4-3 実験などの条件：データの種類や出典、集めた時間、季節、場所などの制約

これらは実験などの対象に影響を与える因子に関するCRとなる。このため、読んだ論文がなぜそれらの条件でデータを集め、なぜそれらが最適と言えるのかを考えながら読む必要がある。要約すると以下ようになる。

- ・CT③ なぜ、それらの条件で検証を行ったのか

#### 4-4 検証に使用したタスクとデータの収集方法

データを集めるのに公刊資料を使ったり、質問紙を活用したりする。また観察や、インタビューを行うこともある。この情報収集の際に対象者や

対象物に負荷を与えるタスクによって、取得したデータの性質は大きく異なる。例えば質問紙調査でも、自由記述と、因子分析の結果などで構築した信頼性の高い質問紙では、得られるデータの性質が大きく異なる。インタビュー調査も自由な形式と、実験者が既定の手順に沿ってコントロールして質問を行うタスクでは、取得できるデータの内容が違ってくる。

論文において、なぜ著者がそのタスクを採用したのか、どうして、その方法が著者の提示したリサーチ・クエスチョンに答えるのに最適なのか、考えながら読む必要がある。以下がCRの問いとなる。

- CR④ なぜ、そのタスクが研究成果を得るのに最適なのか。他のタスクを選ばなかった理由は何か

#### 4-5 収集したデータの分析手法

収集したデータの意味づけを行うのに、著者は特定の分析方法を選択する。例えば、統計分析の多変量解析にも重回帰分析、因子分析、判別分析など様々な手法がある。著者が選んだ分析手法の妥当性を確認すべきである。また、このCRを実行していけば、自分の研究で特定のデータ分析方法を選択する際の参考にもなる。具体的には、レビューした研究の中で、最も使用頻度の高い手法を使うのが無難な選択である。次の例(25)では、「先行研究で確立された手法を活用した」ことが記述されている。このように記載しておけばCook(2010)によって確立された分析方法ということが明示でき、査読者から「なぜその分析方法を使ったのか」という問いをあらかじめ避けることができる。

(25) To solve such a problem Cook (2010) proposes an established inner-outer method that we used here.

以下が、これに該当するCRということになる。

- CR⑤ なぜ、その分析方法が研究課題の達成に最適なのか。他の分析方

法はなかったのか

尚、CRの①から⑤を行うための Critical Review Format を参考までに付表1に掲載している。

実は、査読者が提出された論文原稿を読む際に、このCRの①～⑤の観点から研究の妥当性を確認することになる。これらに対する対策として、本文では十分議論できない場合に、脚注を活用することになる。次の章では、経済学・経営学論文コーパスにおいて、どのようにして査読者のCRに脚注で対応しているのか検証する。

## 5 CRの5つに対処する脚注の書き方

脚注は、先行研究の引用以外に、査読者にとって必要だと思われる説明をあらかじめ加える時に使われていた。主な記載事項は、5つCRの質問項目に事前に対処する内容であった。査読者は、論文の妥当性を確認するためにこれらのCRの観点から読む。以下に経済学・経営学論文コーパス分析で明らかになった例を示す。

### 5.1 CR①への対処：他にも重要な理論やモデルの存在を認識

例の(26)は maximum likelihood の計算方法もあることを認めた上で、ここで採用した方法が英国人には適合すると脚注で補足している。

(26) Maximum likelihood can be used to calculate error risks for the different income levels. However, as Young (2010) demonstrates, the current model is an acceptable for the sample of the British population considered here.

## 5.2 CR②への対処：サンプルの選び方

次の例（27）では、サンプルの被験者の選び方と分類の仕方を脚注で説明している。

(27) Participants in our experiments were randomly selected by their personal ID number and classified according to the characteristics of the participant.

## 5.3 CT③への対処：実験などの条件

（28）は検証の条件に関して、先行研究との違いを脚注で説明している例となる。

(28) Although Scotts (2002) demonstrate the temporal stability of risk attitudes in the lab experiments for relatively short period, our research aim is to examine such attitudes in more authentic contexts in a longer period.

## 5.4 CR④への対処：実験タスクとデータの収集方法

次の例（29）では、研究で使うデータの出典を補足している。

(29) Source: Brand Value Index for 2010 to 2015.

## 5.5 CR⑤への対処：分析手法の例

例（30）は、論文で採用した分析手法が、なぜ適切なのか脚注に記載している。

(30) This analysis method allows us to handle the Financial Crisis in 2008

and unavoidable catastrophes without modifying the framework.

脚注はこれ以外にも、研究助成への謝辞や、グラフや表の詳細な読み方の説明を書くこともある。次の章では、CR や脚注の書き方を踏まえた上で、実際の論文では、いかに Literature Review の章を書いているのか確認していく。

## 6. Literature Review の書き方

Literature Review は、CR の成果を詳しく説明し、研究の前提となる理論的背景を明確にする目的で書かれている。この際、先行研究を活用し、論文で扱う概念や定義を確立していた。これらは研究の妥当性を構築するのに重要な手順と言える。さらに、これまでの研究の貢献を述べた上で、まだ検証されていない課題を記述し、論文の仮説を設定する。次の5項目が Literature Review の主な役割のまとめであった。

1. 研究の背景となる重要な先行研究の引用
2. 論文で取り扱う理論の説明
3. 研究課題に関わる概念の説明や定義
4. 先行研究から導き出される新たな課題の示唆
5. 仮説の設定

以下に経済学・経営学論文コーパスにおいて、どのように Literature Review が記載されていたのか詳しく報告する。

### 6.1 研究の背景となる重要な先行研究の引用

これは、Introduction で記載した研究分野や課題の重要性を、より詳しく

く先行研究を引用して説明するものがあった。関連領域で同様のテーマを扱った代表的な論文を活用して、書き手の研究スタンスを明確にしていく方法である。

### 6.1.1 複数の先行研究を活用しテーマの重要性を再度訴える

Literature Review の最初は、研究課題の重要性について先行研究を活用して再度訴求することから始める。Introduction の章で行う研究テーマの重要性を、さらに詳しく補強していく目的がある。

(31) の例は Berry (2015:1439) の Literature Review である。ブースター表現の long や the most important を使い、研究分野の重要性を訴求している。また現在完了形と複数の先行研究を引用することにより、主張の客観性を構築している。

(31) “Firm knowledge assets have long been considered to be the most important determinant of both expansion and success (Buckley & Casson, 1976; Caves, 1996; Grant, 1996; Teece, 1977), especially in foreign markets (Buckley & Casson, 1976; Dunning, 1980; Hymer, 1960, 1976; Kogut & Zander, 1992)”

## 6.2 先行研究の成果を表にまとめる

重要な先行研究をまとめて表を作り、主な成果や発見を記載すると、査読者にとって読みやすくなる。実際の査読結果のコメントの中で、先行研究の成果を表にまとめるような示唆をすることもある。

例 (32) は、リーダーシップに関する先行研究の成果を表にまとめ、自分の論文の妥当性を構築するのに役立てていることを記述している。

(32) Table 1 summarizes representative papers from leadership research on risk-management to highlight key insights and demonstrate how our

work contributes to this field.

### 6.3 先行研究を分類する

また、先行研究を自分の研究との関連性で分類すると、論文のスタンスが明確になり読みやすくなる。(33) では、バイラル・マーケティングに関する先行研究を3つの分野に分けて議論することを述べている。

(33) We categorize viral marketing research into three major domains: customer needs, behavioral discrepancies, and relational dimensions.

### 6.4 論文の背景となる理論の説明

Literature Review の重要な役割は、研究の背景となる理論を明確にすることである。研究の妥当性を示すために、どのような理論に基づいた議論なのか読者に提示する必要がある。理論の基となる代表的な研究を引用し、その理論がどのように構築されたのか言及する傾向があった。例の(34)は、特定の理論の由来と説明を行っている。また(35)では論文で活用する理論の説明として、その特徴を述べている。

(34) Social capital theory (Edward, 1993) stems from classical capital theory (Eltis, 1984), in which capital is the investment of resources into a marketplace with expected returns.

(35) Resource-based theory deals with definitive models of how economic profits are generated (Blues, 1990; Jordan, 2012). Such models differentiate this theory from other theories in strategic business behaviors (Luke, 2012).

### 6.5 研究課題に関わる概念の説明や定義

仮説の構築に必要な論文で取り扱う重要な概念は、明確な定義を最初に

しておいた方が査読者の誤解を避けることができる。大まかな理論を説明した後、概念の定義について記載していく。

研究の理論的背景に言及した後に、論文で取り扱う主要概念の定義を行う必要もある。この際に(36)のような書き出しが使われていた。今から主要概念の定義を行うことを述べ、その定義が該当分野で適正があることを最初に伝えている。

(36) Several important concepts for this article are defined here. These concepts are defined in ways that are consistent with their current use in micro finance and related fields.

また、論文の中心となる概念は、できるだけ読者に分りやすく定義しておく必要がある。例の(37)は self-reliance の概念を詳しく定義している。

(37) We define self-reliance as the capacity to rely on oneself or one's own capabilities to meet one's personal needs.

## 6.6 先行研究から導き出される新たな課題示唆

概念の定義を構築した後は、Literature Review から導き出される、独自の研究課題に言及している。この際、先行研究では行われていない課題を明示する方法と、これまでの成果をさらに発展させ、新たな理論構築を示唆する方法があった。

### ・先行研究で未達成の課題の示唆

重要な研究テーマにおいて、先行研究の未達成の課題を明示することで、研究の独自性を訴求することができる。(38)の例のように、具体的に新たな課題を提示すると、後に続く論文の研究仮説の構築に導くことができる。Nevertheless というメタディスコースで始め、no research has examined



と研究の Niche を明示している。続く文は、To address this research gap と研究課題の克服方法を述べている。ここでは、より詳細な仮説を設定するための問題提起となっている。

(38) Nevertheless, to date, no research has examined how consumers form these evaluations. To address this research gap, we attempt to explore how the image of nature-friendly products influences consumers' evaluations of daily products.

・これまでの成果をさらに統合発展させる

既存の研究において、解明されていることや、様々な概念を統合して、新たな理論構築へ導く考察も重要な観点となる。例 (39) では、外国投資の分野で考察されていない、分類や概念の構築により、新たな研究の貢献を行うことが記述されていた。

(39) The present research contributes to this work by examining an additional aspect of categorization and concept formation that has not been explored in foreign investment research.

## 6.7 仮説の設定

Literature Review の最後は、先行研究の成果を継承した上で、さらなる研究課題を提示し、論文の研究仮説を明記していくことになる。この際、Accordingly や Therefore など研究仮説の提示を行うことを示すメタディスコースで始める。また仮説に導く英文は、まだ確認していないことなので、ヘッジを使い断定を避けて主張を弱めておくことがある。

次の英文 (40) は Eberhart and Eesley (2018: 2949) の仮説設定の例である。メタディスコースの Accordingly で始め、今までのレビューの結論を述べることを告げている。また、法助動詞の may を使い、予測される投資

家の行動についてヘッジを行っている。さらに、We thus hypothesize という表現で、具体的な仮説を記載している。

(40) “Accordingly, investors may act to restrict their investments to conform to the norms and opportunities of the junior stock exchange even while maintaining the legitimizing narratives of economic return to their investors (Fisher et al., 2016). We thus hypothesize:

Hypothesis 1a (H1a) The introduction of junior stock exchanges increases the initial investment raised by new technology firms.”

## 7. まとめ

今後、世界の大学間競争が一層厳しくなる中で、研究の Citation 力を上げる努力が求められる。このためには、欧米やアジアの先行する大学のように、英語論文執筆に対して戦略的に取り組む必要がある。この一つの方法論として、本論では、これまであまり注目されてこなかった経済学・経営学分野の英語論文における Critical Review の方法と Literature Review の書き方に関する考察を行った。

特に、研究手法の妥当性と信頼性を高めるために、経済学・経営学論文コーパスを構築し分析を行った。インパクトファクターの高い代表的な学術雑誌 8 誌を選び、論文における2006年より2017年掲載の論文から、第一著者が英語母語話者と思われる論文100本を選定した。総語数約150万語の経済・経営論文コーパスデータを作成した。これらを英米書き言葉コーパス200万語を参照コーパスとして特徴語を抽出した。

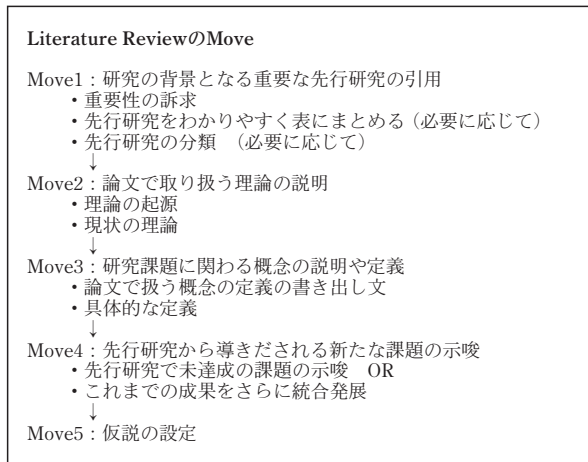
今回の検証は、Literature Review の書き方に重きを置いたため、論文の中で先行研究を引用する際に使われる伝達動詞に注目をした。結果を、3種の伝達動詞である、研究の手順や発見の報告、先行研究の執筆者の考え、先行研究へのコメントに関する分類に沿って、特徴語を時制との関連から

頻度を示し、具体的な使用方法を提示した。このような成果は、これから英語論文を執筆する若手研究者にとって参考になる語彙リストとして活用できる。

これらの分析結果を踏まえて、論文を投稿する前にどのように先行研究のクリティカル・レビューを行えば良いのか、5つのCRの観点から考察を行った。さらに、査読者が行うCRに対処する脚注の書き方を具体的なコーパスの中から抽出して提示した。

以上の議論を基に、本論の主要目的であるLiterature Reviewの具体的な執筆方法をコーパスの例文を使いながら検証していった。結果として、以下のようなLiterature Reviewを執筆する際のMoveが提案できる。

これを参照すれば、経済学・経営学分野の論文における一定の適切なLiterature Reviewが可能となり、編集者が査読者に投稿論文査読の依頼をするかどうかの判断となる基準項目のいくつかを満たすことができる。



今後の課題として、経済学・経営学分野の論文におけるIMRDの各章における詳細なコーパス分析が必要となる。本論で明らかになった観点だけでは、当然ながら編集者や査読者が要求する他の事項に応えるのには不十

分である。また、8つの代表的な学術雑誌を選択したが、これ以外にもインパクトファクターの高いジャーナルはある。また、必ずしもこの基準だけで、論文の質や価値を全て断定できるわけではない。特に日本人研究者の発表した日本語による優れた論文の書き方に関する検証は行っていない。英語論文書き方というのは、論文が採択されるための1つの戦略であり、実際の優れた課題設定や研究の分析や内容の質を改善できるものではない。しかし、これらの点を考慮した上で適切に活用すれば、論文採択のスピードが改善でき今後の研究者への貢献が可能となると考える。

#### 注

- 1) Times Higher Education  
[https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2020/subject-ranking/business-and-economics#!/page/0/length/100/sort\\_by/rank/sort\\_order/asc/cols/scores](https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2020/subject-ranking/business-and-economics#!/page/0/length/100/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/scores)
- 2) 以下の Wiley 社のURL詳しい  
<https://authorservices.wiley.com/Reviewers/journal-reviewers/index.html>
- 3) Wiley 社 : Submission & Peer Review  
<https://authorservices.wiley.com/author-resources/Journal-Authors/submission-peer-review/peer-review.html>

#### 参考文献

- Berry, H. (2015) Knowledge Inheritance in Global Industries: The Impact of Parent Firm Knowledge on the Performance of Foreign Subsidiaries. *Academy of Management Journal*, 58-5, 1438–1458.
- Biber, D., Conrad, S., and Leech, G. (2002) *Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Educated Limited.
- Charles, M. (2006a) Phraseological Patterns in Reporting Clauses Used in Citation: A Corpus-based Study of Theses in Two Disciplines. *English for Specific Purposes*, 25, 310–331.
- Charles, M. (2006b) The Construction of Stance in Reporting Clauses: A

- Crossdisciplinary Study of Theses. *Applied Linguistics*, 27, 492-518.
- Del Sz Rubio, M. M. (2011) A Pragmatic Approach to the Macro-structure and Metadiscoursal Features of Research Article Introductions in the Field of Agricultural Sciences. *English for Specific Purposes*, 30, 258-271.
- Eberhart, R. N., and Eesley, C. E. (2018) The Dark Side of Institutional Intermediaries: Junior Stock Exchanges and Entrepreneurship. *Strategic Management Journal*, 39, 2643-2665.
- Gosden, H. (1993) Discourse Functions of Subject in Scientific Research Articles. *Applied Linguistics*, 14, 56-75.
- Hazelkorn, E. (2007) The Impact of League Tables and Ranking Systems on Higher Education Decision Making. *Higher education management and policy*, 19-2, 81-105.
- Handel, B. R. (2013) Adverse Selection and Inertia in Health Insurance Markets: When Nudging Hurts. *American Economic Review*, 103-7, 2643-2682.
- Hyland, K. (2004) *Disciplinary Discourse*. Michigan: The University of Michigan Press.
- Hyland, K. (2005) *Metadiscourse*. London: Continuum.
- Hyland, K., and Tse, P. (2004) Metadiscourse in Academic Writing: A Reappraisal. *Applied Linguistics*, 25-2, 156-177.
- 石川真由美 (2018) 「国際競争と日本の大学: 世界大学ランキングという鏡を通して」『比較教育学研究』56号 : 140-149.
- Jordan, R. R. (1997) *English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koutsantoni, D. (2004) Attitude, Certainty and Allusions to Common Knowledge in Scientific Research Articles. *Journal of English for Academic Purposes*, 3, 163-182.
- McGrath, L., and Kuteeva, M. (2012) Stance and Engagement in Pure Mathematics Research Articles: Linking Discourse Features to Disciplinary Practices. *English for Specific Purposes*, 31, 161-173.
- Nakatani, Y. (2017a) Exploring Writing Strategies for Guiding readers: The Use of Metadiscourse in CEFR-based Textbooks. *International Journal of Management and Applied Science*, 3-11, 14-17.
- Nakatani, Y. (2017b) The Applicability of Emotional Intelligence through CEFR towards Enhancing Cooperative Teaching and Self-learning in Japan. *WWA*

*Journal*, 6, 18-30.

- Nakatani, Y. (2018) Exploring Goals for Business Writing Strategy Training. *Global Conference on Business and Finance Proceedings*, 13/ 2, 27-31.
- 中谷安男 (2012a) 「アカデミック・ライティングにおけるディスコース・ストラテジー」『法政大学多摩論集』28号：27-43.
- 中谷安男 (2012b) 「アカデミック・ライティングにおける研究者のスタンス：研究論文の Introduction における伝達動詞の時制の検証」『英語コーパス研究』第19号：15-29.
- 中谷安男 (2013) 「アカデミック・ライティングにおける Modal Verb 使用の検証－学術論文の Introduction と Conclusion の比較」『英語コーパス研究』第20号：1-14.
- 中谷安男 (2015) 「社会科学，自然科学，人文科学分野の国際ジャーナルにおける効果的なアカデミック・ライティングの検証」『経済志林』83巻1号：39-59.
- 中谷安男 (2016) 『大学生のためのアカデミック英文ライティング』大修館書店.
- 中谷安男 (2017) 「学術論文における結果報告の検証：社会科学，人文科学，自然科学分野の国際ジャーナルの分析」『経済志林』85/1, 77-103.
- 中谷安男 (2018a) 「社会科学，人文科学，自然科学分野の国際ジャーナルにおける考察の章の分析：緩衝表現ヘッジの検証」『経済志林』86/2, 87-114.
- 中谷安男 (2018b) 「グローバル・ビジネスにおけるライティング・ストラテジー使用の検証」『経済志林』85/4, 699-725.
- 中谷安男 (2019) 「経済・経営国際ジャーナル論文のイントロダクションのコーパス分析：メタディスコースなどによるムーヴ構築方法の検証」『経済志林』86/3・4, 207-230.
- 中谷安男・清水眞 (2010) 「アカデミックコーパスのディスコース・ストラテジーの初期的検証：物理化学論文の Abstract における Move 分析」『英語コーパス研究』第17号：17-32.
- 中谷安男・土方裕子・清水眞 (2011) 「アカデミックコーパスにおける Coherence 構築のストラテジー：Science の Discussion における Information Order の検証」『英語コーパス研究』第18号：1-16.
- Nelson, M. (2006) Semantic Associations in Business English: A Corpus-Based Analysis. *English for Specific Purposes*, 25, 217-234.
- Nwogu, K. N. (1997) The Medical Research Paper: Structure and Function. *English for Specific Purposes*, 16-2, 119-138.

- Salager-Meyer, F. (1992) A Text-type and Move Analysis Study of Verb Tense and Modality Distribution in Medical English Abstracts. *English for Specific Purposes*, 11, 93-113.
- Shaw, P. (1992) Reasons for the Correlation of Voice, Tense, and Sentence Function in Reporting Verbs. *Applied Linguistics*, 13, 302-319.
- Starbuck, W. H. (2005) How Much Better Are the Most-prestigious Journals?: The Statistics of Academic Publication. *Organization Science*, 16-2, 180-200.
- Swales, J. M. (1990) *Genre Analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Swales, J. M. (2004) *Research Genre*. New York: Cambridge University Press.
- Takayama, K. (2008) The Politics of International League Tables: PISA in Japan's Achievement Crisis Debate. *Comparative Education*, 44-2, 387-407.
- Yang, R. and Allison, D. (2003) Research Articles in Applied Linguistics: Moving from Results to Conclusions. *English for Specific Purposes*, 22, 365-385.

付表 1 Critical Review Format (CRF)

Author (s):	Published Year	CR	Review No.
Title:			
Journal:	Volume:	Pages	
1. Background Theories or Models (背景となる理論やモデル)			
Why?			
2. Sample(s) (研究の対象)			
Why?			
3. Research Conditions (研究の条件)			
Why?			
4. Tasks (検証タスクとデータ収集方法)			
Why?			
5. Data Analysis (データ分析手法)			
Why?			
6. Limitations: (著者が述べている研究の不十分な点)			

## How to Conduct a Critical Review and Develop a Literature Review in Economics and Management Journals

Yasuo NAKATANI

### 《Abstract》

This study explores how persuasive literature review sections in Economics and Management Journals can be developed by using corpus data analysis. Although the importance of the critical review for developing a literature review section in research articles has been recognized, few studies precisely investigate the structure of these research genres. This study conducts a quantitative investigation of 100 representative research papers in social science by comparing the FBROWN and FLOB as reference corpuses. Keyword word analyses are introduced to examine relevant expressions in the research articles. The results indicate that the specific use of reporting verbs in a literature review has a significant effect on guiding readers in academic fields.